

# Modality and Japanese conditional ‘to’

**Yukiko Muramatsu**

Japanese has a conditional pattern, *S1 to S2*, and it is said that this pattern is not appropriate for expressing one’s own requests, suggestions, invitations or intentions. But on some condition, these sentences can occur in the consequent of *S1 to S2*.

This paper studies two points on *S1 to S2*. One point is to define the difference between the case that modal expressions can be used in the consequent and the case that they can not occur there. And the other point is to explain the change of acceptability of modal expressions in *S1 to S2* by the relation to the topic. On these points, this study shows that we can use modal expressions when there is the presumption that the act described in the consequent will be realised and that acceptability of *S1 to S2* becomes higher by putting an element in the consequent at the beginning of the sentence.

# 「と」条件表現におけるモダリティ

村 松 由起子

## 1 はじめに

本稿の目的は、「と」条件表現の後件に現われるモダリティ的表現にどのような制約があるのかを明らかにすることと、後件にモダリティ的表現が用いられているという理由から従来不適格文であるとされている表現が、後件の要素を主題化することによってその許容度が高くなるという現象を示し、許容度が高くなる理由を究明することである。

接続助詞「と」を用いた条件表現には、後件に「～てください」や「～たい」といった話し手の意志的態度を表わす表現（以下、モダリティ的表現とする）が現われないという特徴があり、次の1) 2) 3) のような表現は、従来、後件にモダリティ的表現が用いられているために不適格文であると説明されてきた。

- 1) \*日が沈むと窓をしめてください。
- 2) \*雨が降ると車で行きたい。
- 3) \*新しいCDを買うと君にも貸してあげるよ。

しかし、次の4) 5) 6) のように、後件にモダリティ的表現が用いられていても自然な場合もあり、1) 2) 3) が不適格文であるのは後件にモダリティ的表現が用いられているからであるという説明では不十分であるといえよう。

- 4) 動くと撃つぞ。
- 5) 宿題をやらないとおやつをあげませんよ。
- 6) 冷たいものじゃないと飲みたくない。

このように「と」条件表現には、後件にモダリティ的表現が現われる場合と現われ得ない場合がある。本稿では、まず、「と」条件表現の後件にどのようなモダリティ的表現が現われ得るかを検討し、モダリティ的表現が現われ得る場合の制約を考察していく。

次に主題化の問題であるが、1) の場合を例にすると、1) の後件の要素である「窓」を主題化した7) は1) よりも許容されやすくなるのがわかる。

- 7) ?窓は、日が沈むと閉めてください。

この点について、本稿では、どんな要素を主題化すると許容度が高くなるのか、また、何故許容度が高くなるのかを検討していく。

## 2 後件の制約

まず、「と」条件表現の後件とモダリティ的表現について、どのような指摘がなされてきたかを述べておきたい。

「と」条件表現の後件にはモダリティ的表現が現われないということは、従来から指摘されてきたが、例えば鈴木 1972<sup>1)</sup> は次のように述べている。

この形は、他のすべての条件の形とことなって、条件と帰結の関係が、話し手の意志によって左右されるばあいの条件はあらわさない。

したがって、この形につづける文(つきそい文)に対応するいいおわる文には命令、意志、さそいかけ、すすめ、許可、希望など、話し手の意志的な態度(モダリティ)をあらわす文はあらわれない。

鈴木はこのように「モダリティをあらわす文はあらわれない」としているのであるが、森田 1980<sup>2)</sup> は次のように「未確定な意志は現われにくい」とし、モダリティ的表現が現われ得ることを示唆している。

結果的に「……と……たい／……と……しよう／……と……ほうがいい／……と……てください」のような未確定な意志は現われにくい。「……と……だろう」の予想は現われるが、これも話し手の恣意を超えた因果関係の成立を「だろう」と判断する「と」の発想である。

森田 1980 には、モダリティ的表現が用いられている例はあげられていないが、先の 4) 5) 6) をみても明らかなようにモダリティ的表現が現われる場合もあることから、森田の指摘のほうが妥当であるといえよう。本稿では、森田の指摘にさらに分析を加え、どのような場合にモダリティ的表現が現われ得るのかを明らかにしたい。

## 3 本稿で扱うモダリティ的表現

本稿で扱うモダリティ的表現は以下の通りである。<sup>3)</sup>

- ……と……(ル形で意志を表わす)
- ……と……よう
- ……と……たい
- ……と……てください

#### 4 後件にモダリティ的表現が現われる場合

この章では、後件にモダリティ的表現が現われない場合と現われる場合を比較し、次に後件にモダリティ的表現が現われ得るための条件を考察する。

次の8) 9) は、鈴木 1972 が後件にモダリティ的表現は現われないとしてあげている例である。

8) \*学校につくと、運動場で遊んでいなさい。

9) \*たくさんつれると、きみにもわけてやる。

鈴木 1972 には「……と……よう」と「……と……たい」の形式を用いた例があげられていないので、次の10) 11) を追加したい。

10) \*雨が降ると中止にしよう。

11) \*秋になると紅葉が見たい。

では、モダリティ的表現が現われる場合にはどのような表現があるであろうか。

実際は、本稿で扱う4つの形式のすべてにモダリティ的表現が現われる場合があるわけではない。「……と……てください」「……と……よう」「……と……たい」の形式は「と」条件表現の後件には現われないようである。次の12) (4)にも同じ) は、ル形で意志を表わしているが自然な表現であり、13) 14) 15) は前件は12)と同じでも不自然な表現である。

12) 動くとき撃つぞ。

13) \*動くとき撃ってください。

14) \*動くとき撃とう。

15) \*動くとき撃ちたい。

しかし、不自然な表現になる形式でも、前件と後件が否定の形の場合は次の16) 17) 18) のように自然な表現に成り得るようである。

16) 宿題をやらないと、おやつをあげませんよ。(5)と同じ)

17) 冷たいものじゃないと飲みたくない。(6)と同じ)

18) ?この薬は、痛くないと飲まないでください。

後件にモダリティ的表現が現われる場合の例を見ていくと、前件、後件ともに否定の形の表現が多いことに気付く。

否定の形のほうが、後件にモダリティ的表現が現われやすい理由であるが、これは森田 1980<sup>4)</sup>が指摘している次のような「と」条件表現の特徴と関わっていると思われる。

森田は、「うちを出ようとする時、雨が降っていた」を例にあげ、「と」は、「前件(条件句)が前提としてまずあって、“うちを出ようとする時、どうだったのか?”の条件課題に対して、“雨が降っていたんです”の解答を示す発想である」としている。

つまり、「と」条件表現は前件よりも「どうだったのか」を述べる後件の方が焦点化されやすい表現であるといえよう。このことは、「と」条件表現が後件を省略した形では用いられにくいことからしても妥当な考え方であろう。次の19) 20) のように、「と」条件表現の後件は省略できな

い。

19) A：この辺にポストはありませんか。

B：\*あの角を右に曲がると。

20) A：すみません、トイレはどこですか。

B：\*そこを曲がって左に行くと。

20) の場合「どこ」という質問に答えているのであるから「そこを曲がって左」という情報の重要度は高い。当然「そこを曲がって左」が焦点化されやすいはずである。しかしこれが焦点になる場合には、「と」条件表現ではなく、「(トイレは)そこを曲がって左です」という表現になるであろう。

では、否定の形の場合はどうであろうか。

結論から述べると、「～ないと」の場合は、前件が前提として存在するより以前の段階で「後件で示される動作・行為がなされるであろう」と話し手が判断するような状況(話し手の意志も含めて)が前提<sup>9)</sup>として存在し、そのため前件で述べられる情報の重要度がより高くなり、前件に焦点<sup>10)</sup>が移りやすいという特徴をもつ。それゆえ、本来は「と」条件表現とは結び付きにくい後件のモダリティ的表現が強調されなくなり、許容されやすい表現になるのであろう。先の 16) 17) 18) の例で考えてみると、16) では「おやつをあげる」という前提が、17) では「なにか飲みたい」という前提が、18) では「薬を飲む」という前提があり、これらの状況を前提とした上で条件を述べている。前件で述べられる条件はこれらの前提を実現させるために防げになる条件である。そのため、これらの「～ないと」の表現では、後件の動作・行為がどのようなものかということよりも、後件で示されている動作・行為が実現されるための条件となる前件のほうが重要な情報となり、本来は後件にある焦点が、前件に移りやすくなると考えられる。

焦点が前件にあるか後件にあるかによって許容度が変わるとすると、先の 16) 17) 18) のうちで、命令表現である 18) が、最も許容されにくいという点も説明できるであろう。命令表現は、希望、意志よりも話し手の主張が強いので、希望、意志に比べて焦点があたりやすい。そのため、「と」とは結び付きにくい命令表現が強調され、他の例と比較すると許容度が低くなるのである。一方、後件の動作・行為が行われるであろうという前提があれば、前件に焦点があたりやすくなるため、次の 21) 22) のように前件が肯定の形であっても成立する。

21) いたずらをすると、おやつはあげないよ。

22) 徹夜をすると、翌日仕事はやりたくない。

しかし、後件の動作・行為が行われるであろうことが前提になっていないと、否定の形でも焦点が後件に存在しやすくなり、23) 24) のように許容度の低い表現となる。

23) \*雨が降らないと、行ってください。

24) \*中華料理じゃないと、食べに行きたい。

ところが、23) 24) の場合でも、例えば「あすは雨がふりそうだから行けそうにないが」や「最近中華料理ばかり食べているので中華料理は食べたくないが」のような前提があると「雨が降ら

ないと」や「中華料理じゃないと」に焦点があたりやすくなり、許容されやすくなるであろう。次の25) 26) を見てほしい。

25) A：すまないけど、あす、駅前でアンケートをとってくれないか。

B：あすですか。天気予報だとあすは大雨が降るそうですよ。雨だとちょっと……

A：そうか。雨じゃあしかたないな。別の日にするか。でも、？雨が降らないと、行ってくれよな。

B：ええ、いいですよ。

26) A：一緒にお昼食へに行きませんか。安くておいしい中華の店を見つけたんです。

B：いえ、中華はちょっと……。このところ中華を食べる機会が多くて。？中華料理じゃないと、一緒に食べに行きたいんですが、ほかの店じゃあだめですか。

以上のことから、次のようにいえるであろう。

「と」条件表現の後件にはモダリティ的表現は現われにくい。その理由としては、後件は前件で示す条件が成立すれば客観的に実現が決定する事柄でなければならないことと、「と」条件表現は、後件が焦点化されやすいことが考えられる。

しかし、前件が前提として存在する以前に、後件で示される動作・行為が行われることが前提となっているような場合（否定の形に多い）には、前件のほうに焦点が移りやすくなるため、モダリティ的表現が現われ得るようになる。また、このような場合には、後件で示される動作・行為の実現がすでに前提の段階で考慮されているので、モダリティ的表現を用いても、前件が成立すると後件で示される事柄が自然に実現するという客観性が高くなることも考えられよう。

ここまででは、否定の形か肯定の形かを問題にしながらか考察を進めてきたのであるが、「と」条件表現の否定の形には次のような特徴があることも述べておきたい。

次の27) 28) では、前件の部分を取り出して、それをいいきりの表現にすることはできない。

27) そろそろ行かないと間に合わないよ。

\*そろそろ行かない。

(「そろそろ行かない？」のように問いかけ表現にすれば可能である。)

28) 少しは食べないとからだに悪いよ。

\*少しは食べない。

(「少しは食べない？」のように問いかけ表現にすれば可能である。)

また、次の29) は、前件の部分を取り出して、それをいいきりの表現にすることはできるが、「～ないと」表現で表わされる内容とは違う内容になる。

29) もう寝ないとあした起きれないよ

もう寝ない。

(「もう寝ない？」の問いかけ表現は「～ないと」と同じ内容になる。)

これらの例を見ると明らかなように、いいきりの表現と「～ないと」表現とでは、「ない」で否定される内容に違いがある。

益岡 1989<sup>7)</sup> は、「(36) 私は一生懸命働かなかった」((36) は益岡のもの) について、「否定の対象となるのは、“働(く)” だけではない。“一生懸命” も否定の対象の主要部分である。否定の対象が“働(く)” だけに限定されていると、“一生懸命” は、“働かない” を修飾することになり、(36) の意味を正しく説明することができない」と述べている。この益岡の指摘を 27) 28) 29) にあてはめて考えると、「ない」は、27) では「そろそろ行(く)」を、28) では「少しは食べ(る)」を、29) では「もう寝(る)」をそれぞれ否定していることになる。27) 28) 29) がいいきりの表現にできない(あるいはいいきりの表現にすると表わす内容がかわってしまう)のは、いいきりの表現にすると、「そろそろ」「少しは」「もう」はそれぞれ、「行かない」「食べない」「寝ない」を修飾するからであろう。そうすると、いいきりの表現で「ない」が使われる場合と、「～ないと」表現では、「ない」によって否定される対象が異なるということになる。

では、否定と呼応する要素を用いるとどうであろうか。

30) \*全然食べないとからだに悪いよ。

31) \*この問題がさっぱりわからないと次の問題に進めません。

30) 31) の例のように、「～ないと」内に「全然」「さっぱり」など否定のみ呼応する要素(副詞)があると不自然な表現になる。これらの例が不自然になるのは「ない」が「\*全然食べる」「\*さっぱりわかる」を否定する構造になるからであろう。

次の 32) 33) の「何も」「一度も」は、本来は否定の対象となりうる「何か」「一度は」とすべきであろう。

32) 何も食べないと、からだに悪いよ。

33) 一度も行かないと、あとで何を言われるかわからない。

このような特徴が、「と」条件表現におけるモダリティ的表現の現われやすさと関わりがあるのか否かの検討は今後の課題である。

## 5 主題化と許容度

この章では、本来不適格文である表現が、後件の要素を主題化することによって、その許容度が高くなるという問題について、どのような要素を主題化すると許容されやすくなるのか、また、許容されやすくなる理由は何かを検討していく。

検討に入る前に、「と」条件表現の場合、前件の要素は主題化できないということを述べておく。

「と」に限らず、「たら」「れば」「なら」などの条件表現の前件のみにかかる要素は主題化できない。次は、寺村 1991<sup>8)</sup> の例であるが、「大使が公邸にもどると」の「大使」を主題化した 34) は不自然な表現であるが、35) は前件と後件の主体が一致しており、「大使」は前件のみでなく後件の要素にも成り得るので自然な表現となる。

34) \*大使は公邸にもどると、学長はすでに来て夫人と相談をはじめていた。

35) 大使は公邸にもどると、夫人をよんで相談をはじめた。

「と」条件表現にこのような制約があることから、本稿では後件の要素のみを扱っていく。

次は、先の8) 9) の例を主題化したものである。8) 9) は不適格文であったが、36) 37) は8) 9) よりも許容されやすいのではなかろうか。

36) ?きみは、学校につくと運動場で遊んでいなさい。(それからきみは図書館で勉強していなさい。)

37) ?わたしは、たくさんつれるときみにもわけてあげるよ。(かれはいくらつれてもわけてくれないだろうが)

では、何故、後件の要素を主題化すると、許容度が高くなるのであろうか。この許容度が高くなるという問題は、後件にくる命令、希望、意志といった表現の特徴と関わっているようである。

命令、希望、意志などの表現では、一般に、動作・行為の主体(わたし、きみなど)は表現上には現われない。敢えて主体を表現上に現わすと、次のように対比や排他的なニュアンスがでてくる。

38) きみは／きみが食べなさい。

39) わたしは／わたしが行きたい。

40) わたしは／わたしが行く。

この対比や排他的なニュアンスがでてくることについて、仁田 1989<sup>9)</sup> は、「お前は行け／お前は来るな!」「私達は行きましょう」「僕は研究会に行こう」の例をあげて、これらの「は」は、「単なる題目を表すことができず、不可避的に対照を表さざるをえない」としている。また、「が」については、「中立的な叙述を示すものではなく、外の間人ではなくお前が、といった排他特立を表している」としている。その理由として仁田は「これらの文が主体を表層の表現形式に顕在化させないことが普通であることによって。現わさなくても了解可能な主体を敢えて表層の表現形式に表現することによって、主体は対照や排他特立の意味を帯びることになるものと思われる」と述べている。

命令、希望、意志の表現にこのような特徴があることは主題化の問題を考察するにあたり、おさえておく必要がある。これらの表現では、その動作・行為の主体を現わすこと自体がすでに他のものと主体を比較対照しているものであり、36) 37) がそれぞれ( )で示したような状況のもとで許容されやすくなるのもそのためである。

以下、主題化と許容度について、本来表現上には現わされない動作・行為の主体を主題化した場合と、後件の主体以外の要素を主題化した場合に分けてみていくことにする。

まず、後件の動作・行為の主体を主題化した場合について、命令、希望、意志の表現の順に検討していく。

次の41) 42) 43) を比較してみると、主題化していない41) 42) に比べて、後件の動作・行為の主体を主題化した43) が最も許容されやすいのではなかろうか。

41) \*太郎がほしがるとあげてください。



42) \*太郎がほしがるあなたは／あなたがあげてください。

43) ?あなたは、太郎がほしがるとあげてください。

仁田にしたがって考えると、42)と43)は「あなたは／あなたが」で動作・行為の主体を現わしているの、対比や排他立的なニュアンスがでていう点では共通しているはずである。しかし、42)と43)の許容度を比べると、43)のほうが明らかに高い。この42)と43)の許容度の違いは何によるのであろうか。

42)と43)の許容度の違いは、43)が「あなた」を主題化することによって、あなたが置かれている立場、状況を説明的に述べているのに対して、42)はあなたの立場、状況について述べているのではなく、話し手から聞き手への命令を述べているにすぎないことからくる違いであろうと思われる。

この語順に関する問題については森山1988<sup>10)</sup>が「この花は雨が降ると枯れる／雨が降るとこの花は枯れる」を例にして、「条件表現(雨が降ると)がアクチュアリティをなくす成分として、つまり、特定の時空に位置づけられない表現とさせ、性向や能力をあらわす表現となる。語順も関係していて、条件表現が先にくると、性質を述べるというニュアンスがなくなるようである」と指摘している。ここでの43)の例は、41)が不適格文であるため、主題化していなくても適格文である「この花は雨が降ると枯れる」に比べ許容度は低くなる。それでも42)より許容されやすいのは、動作・行為の主体を主題化することによって、「主体について述べる」というニュアンスがでてくるためであろう。

では、次に希望や意志の表現をみてみよう。命令表現同様に、後件の主体を主題化すると許容されやすくなるのであろうか。次の44)45)46)は後件が希望表現の例、47)48)49)は意志表現の例である。

44) \*横浜へ行くと中華料理が食べたい。(「食べなくなる」なら適切な表現)

45) \*横浜へ行くと私は中華料理が食べたい。

46) ??私は、横浜へ行くと中華料理が食べたい。

47) \*あの子が合格すると御祝をあげるよ。

48) \*あの子が合格すると私は／私が御祝をあげるよ。

49) ?私は、あの子が合格すると御祝いをあげるよ。

やはり、主題化している46)49)は、他の主題化していない例に比べ、許容しやすいといえよう。ただし、主題化している46)と49)を比較すると46)は49)より許容度が低いようであるが、この46)と49)の許容度の違いについてはあとでふれることにする。

それでは、動作・行為の主体以外の要素を主題化した場合はどうであろうか。次の例のうち51)53)55)は、50)52)54)の主体以外の要素を主題化した表現である。

50) \*雨が降ると窓をしめてください。

51) ?窓は、雨が降るとしめてください。

52) \*夜になると音楽が聞きたい。

53) ??音楽は、夜になると聞きたい。

54) \*たくさんつれると魚をわけてあげるよ。

55) ?魚は、たくさんつれるとわけてあげるよ。

やはり、主題化した51) 53) 55)のほうが、主題化していない50) 52) 54)に比べ、許容されやすいようである。ただし、46)が49)より許容度が低かったように、53)も51) 55)より許容度が低くなる。

以上のことから、動作・行為の主体以外の要素を主題化した場合についても、主題化していない場合に比べると許容度が高くなるとしてよからう。

では、後件の要素を主題化する場合に、希望の表現の46) 53)が他の命令表現や意志表現に比べて許容されにくいのは何故であろうか。

ここで、主題化される要素と許容度との関わりについて考えてみたい。

菊池1988<sup>[11]</sup>は、「Aさんは、書いた本がよく売れる」と「??Aさんは、さっきまで読んでいた本がそこに落ちているよ」は文の構造としては同じなのに許容度が分かれることを指摘し、前者と後者の許容度の違いは「述部が、主題化された語句に関する情報としてどれだけ成り立ちやすいか」によるとしている。

51) 53) 55)のうちで、55)の意志を表わした表現が最も許容されやすいのは、話し手がすでに「あげる」という行為の実現を決定しているため、主題化されている「わたし」(話し手)の情報として成り立ちやすいからであろう。一方、46) 53)の許容度が低いのは、希望表現では表わされている動作・行為が実現するか否かは問われていないため、希望表現が、主題化される要素自体(46)では「わたし」53)では「音楽」)の情報としては成り立ちにくいからであろう。51)の命令表現は、前件で示した条件が成立すると後件の行為が実現することを前提としているので、主題化されている要素の情報として成り立ち得るのだと考えられる。

さらに、次の56) 57) 58)を比較してみると、56)が最も許容されやすく、58)は「流し」が主題化されているにもかかわらず、許容できない。56)が許容されやすいのは、「片付けてください」が、主題化されている「あなた」の情報として成り立ちやすいからであり、58)が許容できないのは、「片付けてください」が、主題化されている「流し」の情報として成り立ちにくいからである。

56) ?あなたは、飲み終るとカップを流しへ片付けてください。

57) ?カップは、飲み終ると流しへ片付けてください。

58) \*流しへは、飲み終るとカップを片付けてください。

つまり、「片付けてください」は、主体や対象の情報としては成り立ち得るが、場所の情報としては成り立ちにくいといえる。

以上のことから、「と」条件表現とモダリティ的表現との関わりを主題化の視点からまとめると「と」条件表現の後件にはモダリティ的表現が現われにくい、後件の要素を主題化すると後件にモダリティ的表現が現われても許容されやすい。主題化した場合の許容されやすさは、主題化し

た要素のあとにつづく部分が主題化する語句の情報としての成り立ちやすいか否かによる。」ということになる。

## 6 む す び

従来指摘されてきたように、「と」条件表現の後件にはモダリティ的表現が現われにくいのは確かである。しかし、その現われにくさは、本稿で考察した意志、希望、命令の表現だけを見ても、一様ではないことがわかる。

本稿の考察から、「と」条件表現であっても、前件が焦点化されやすい場合には後件にモダリティ的表現が現われ得ることと、後件にモダリティ的表現が用いられているために不適格文になる場合でも、後件の要素を主題化すれば許容度が高くなる場合があることが明らかになった。

さらに、希望表現と命令表現には、次のような違いがあることも本稿の考察から指摘できよう。希望表現は、前件が焦点化されると後件に現われ得るようになるが、不適格文の後件の要素を主題化しても許容度は低い。一方、命令表現は、前件が焦点化されても後件には現われないが、不適格文であっても、本稿で検討した条件を満たす要素を主題化すると許容度が高くなる。このような違いは、「と」条件表現とそれぞれのモダリティ的表現の結び付き方が異なることを示しているといえる。

### 注

- 1) 鈴木重幸 1972『日本語文法・形態論』むぎ書房 p. 355
- 2) 森田良行 1980『基礎日本語2』角川書店 p. 399
- 3) 本稿で扱うモダリティ的表現は、仁田義雄 1989が発話・伝達のモダリティの〈待ち望み〉としている情意的なモダリティをもつものである。仁田 1989 p. 5
- 4) 森田良行 1980 p. 398
- 5) ここで「前提」としているのは、語用論的な前提であり、前提は発話がなされる場面・状況の中で決められるものである。
- 6) 焦点については、久野章 1978『談話の文法』大修館、毛利可信 1980『英語の語用論』大修館などを参照した。
- 7) 益岡隆志 1989「モダリティの構造と疑問・否定のスコープ」『日本語のモダリティ』くろしお出版 pp. 194-196
- 8) 寺村秀夫 1991『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版 p. 51
- 9) 仁田義雄 1989「現代日本語文のモダリティの体系と構造」『日本語のモダリティ』くろしお出版 p. 10
- 10) 森山卓郎 1988『日本語動詞述語文の研究』明治書院 p. 278
- 11) 菊池康人 1988「従属節中の語句の主題化と分析できる「XがYがZ」文について」『東京大学言語学論集'88』 p. 206

### 参考文献

Noriko Akatsuka 1985 Conditionals and the epistemic scale. *Language* Vol. 61 NO. 3

- 阿部八郎 1985 『研究資料日本文法第7巻助辞編(三)』 明治書院
- 菊池康人 1988 「従属節中の語句の主題化と分析できる「XがYがZ」文について」『東京大学言語学論集 '88』
- 久野 暉 1973 『日本文法研究』 大修館
- 鈴木重幸 1972 『日本語文法・形態論』 むぎ書房
- 寺村秀夫 1991 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』 くろしお出版
- 中島悦子 1991 「日本語と中国語条件表現—「と」と“一”と“就”を中心に—」『日本語教育 72号』
- 仁田義雄 1989 「現代日本語文のモダリティの体系と構造」『日本語のモダリティ』 くろしお出版
- 益岡隆志 1989 「モダリティの構造と疑問・否定のスコープ」『日本語のモダリティ』 くろしお出版
- 南不二男 1974 『現代日本語の構造』 大修館
- 森田良行 1980 『基礎日本語2』 角川書店
- 森山卓郎 1988 『日本語動詞述語文の研究』 明治書院
- 毛利可信 1980 『英語の語用論』